



かへり見て暑かりし日は輝けり

(山口志津女)

先日、ヨーロッパの各地が熱波に見舞われ、あちこちで「ここ数年ぶりの最高気温を更新！」というニュースを耳にしました。ここオランダでも暑い日が続きました。しかし、子どもたちはものともせず、晴天に歓喜して校庭を駆け回っています。お昼になれば、太陽の陽射しの下で輪になってお弁当を食べています。自分にもあんな子ども時代があったはず…と遠くなったあの頃に思いを馳せれば、確かに友と大笑いしている自分、忘れられない出来事は、暑い夏の日思い出ばかりのような気がします。運動会、林間学校と、子どもたちにとって楽しい行事が無事終わりました。きっと輝かしい大切な思い出として心の中に深く刻まれたことでしょう。

◆ 7月の学校行事 ◆

- 2日(日) 第1回英検(2次)
- 3日(月) 小学部朝会
- 4日(火) 教育相談週間(～12日)
クラブ⑤
ランチコンサート(中学部)
- 6日(木) お話の森③
- 10日(月) 歯科指導(小1・2)
- 13日(木)～18日(火)
個別懇談会
- 17日(月)・18日(火)・20日(木)
水泳教室
- 19日(水) 学校説明会(中学部)
- 21日(金) 第一学期終業式
- 22日(土)～夏季休業(8/21まで)

☆全力を出し切った 合同運動会☆

6月10日(土)は子どもたちが待ちに待っていた合同運動会でした。今年度は例年より少し遅い日程での開催となりました。心配されていた天気も、子どもたちの意気込みに気おされたのか、朝から青空が広がりました。

オランダ国内から550人あまりの児童生徒が集まりました。1000人を超える大観衆の声援のもと、子どもたちは友だちと助け合い、最後まで精一杯走りました。

ボランティアとして校内の環境整備にご尽力くださいました保護者の皆様、PTA役員の皆様、ありがとうございました。



♪ランチコンサート♪ 6月27日
玄関ホール中に美しい音色が響きました



全児童生徒が参加した大玉おくり 6月10日

教育相談週間

校長 尾後貫 智

今年もすでに半年が過ぎようとしています、日本国内では相変わらず中学生のいじめによる自殺の報道が後を絶ちません。その報道を聞いて多くの保護者や学校関係者が心を痛めていることと思います。

教育の基本は、授業においても、生活指導においても児童生徒理解です。児童生徒の実態をしっかり把握し、それに立脚した授業でなければ、子どもたちが理解を深める授業にはなりません。また、児童生徒の状況や気持ちを理解した上で指導しなければ、子どもは心を開くこともなければ、心に落ちる指導もできません。これは、たとえ時代が変わろうとも、変わらない事実だと思っています。

そこで、学校では7月と12月に教育相談週間を位置づけています。基本的に毎日の教育活動そのものが我々教師にとって児童生徒理解の場であることは言うまでもないことですが、この期間は特に一人一人の子どもたちの話にしっかり耳を傾けようと設けているのです。

公共広告機構のCMに「逆授業参観」という30秒の映像をご覧になったことはありますでしょうか。親が教室で椅子に座って黒板に向かい、子どもたちが後ろで立って参観している構図です。親が作文を書いて発表する授業で、テーマは「息子」「娘」となっています。しばらくして一人一人作文を発表していくわけですが、どの親も発表がしどろもどろになってしまうと言った内容でした。その最後に表示されるテロップが、「子どものこと、どのくらい知っていますか？」というものでした。

「ひとりの子を粗末にしたとき、教育はその光を失う」この言葉は、教え子の死を原点に先覚の教育を实践したと言われ、「東洋のペスタロッチ」と称されている安部清美先生の言葉です。教え子が、運動会のリレーの練習中に突然心臓麻痺で急逝したもので、担任が非難を浴びることはなかったのですが、安部先生は自責の念が強く「自分は子どものことを何も理解していなかった」と思い、自殺を決意しました。ギリギリのところまで同僚によって助けられ、その失意の中で誓った言葉が、「ひとりの子を粗末にしたとき、教育はその光を失う」だったのでした。

これは大正時代の話ですが、大正であろうと、平成であろうとまたAIが導入される近未来の教育になったとしても、児童生徒理解が教育の基本であることは、普遍的な事実です。この教育の基本がなおざりになった時、様々な現象が教育現場で表出してくると私は思います。その一つの表れがいじめであると思います。ですから、一人一人の児童生徒を固定的に理解するのではなく、子どもは、子どもを取り巻く環境は、絶えず変化していることを念頭に置いて日々新たな児童生徒理解を進めていきたいと思っています。